

第3回北九州市地域コミュニティビジョン検討会議・発言要旨

1 開催日時 令和7年7月16日(水) 18:00~20:00

2 開催場所 プレゼンルーム(本庁舎5階)

3 議題

(1)事務局説明

・これまでの振り返りと本日の議題

(2)意見交換

(3)今後の予定

4 出席者氏名

〔構成員〕(順不同)

多田 政博	若松区自治総連合会会長
日高 徹	西小倉校区まちづくり協議会会長
太田 康子	北九州市婦人会連絡協議会事務局長
古賀 由布子(欠席)	Say!輪(セイリング)代表
西村 健司	一般社団法人 コミュニティシンクタンク北九州代表理事
勢一 智子	西南学院大学法学部教授
松永 裕己	北九州市立大学大学院マネジメント研究科教授
大熊 充	うきはの宝株式会社代表取締役
古賀 えみ子	一般社団法人北九州シニア応援団代表理事
中村 真理子	元市民センター館長
斉藤 磨希	Z世代課パートナーズ

〔北九州市〕

事務局以外に武内市長、江口副市長も出席

5 議事概要:配布資料に基づき事務局より説明、意見交換

6 会議経過(発言内容)

【議題(1)事務局説明要旨】

＜「これまでの振り返りと本日の議題について」の説明＞

- 北九州市地域コミュニティビジョン検討会議は、地域コミュニティの将来像を示す骨太の方針として北九州市の地域コミュニティビジョン策定のために開催している。
- 5月28日に開催した第2回検討会議でのご意見を振り返させていただくと、「発想の転換あるいは若者の視点を取り入れることが重要である」「地域はもともと安心して暮らすために取り組まれてきた」「安心・幸福感・互助」「地域コミュニティで最終的に最も大事なものは安心と幸福感、幸福を感じるコミュニケーションではないか」「地域コミュニティのあり方と必要な機能についての議論が必要」「北九州全体で一律で決めていくのは難しいところがあり、地域特性に応じて変える部分があっても良いのでは」「学校の役割は非常に大きい」「持続可能性を高めるためビジネス、NPO、企業との掛け合わせの視点も重要」「地域ニーズを把握して取り組むと受け入れられやすい」や市民センターの課題、町内会加入のハードルを下げる方法など、さまざまなご意見を頂戴した。
- この結果を踏まえ、本日の議論の材料としていくつか深掘りさせていただいた。一つは「地域コミュニティは、安全安心な暮らし、幸福感を感じるコミュニケーションが大事」というご意見を踏まえたものである。コミュニティに造詣の深い京都大学名誉教授の廣井良典先生による『ウェルビーイング・幸福の重層構造』を参考にした。廣井先生は、幸福・ウェルビーイングをピラミッド型の重層的な構造で示されている。その土台となる部分には、人が生きていくうえで必要不可欠であり、幸福の基礎条件として「生命/身体(機能の維持)」をあげている。土台の次に幸福の条件となるものとして「他者とのつながり」を示され、これを廣井先生は「コミュニティ」と呼ばれている。人から承認されたり、帰属意識を持ったりすることで、自尊心や誇りなど、人とのつながりによって生まれるさまざまな要素が人の幸福にとって極めて重要な位置を占めているということだ。幸福や楽しさを感じる人とのつながりがコミュニティの原点であるとされ、ピラミッドの最上段には個人の層があり、個人の自己実現、多様な価値観という側面が非常に強くなっていくそう。
- 上記のことから、「人の幸福につながる他者とのつながりの創出がコミュニティの重要な役割である」と整理できると考える。
- ピラミッドのコミュニティ部分で生命/身体(機能の維持)に近い機能は、例えば、孤独、孤立の防止、防災、防犯、暮らしに欠かせないゴミステーションの管理などは、前回の会議で出た「安全安心な暮らし」のため、地域コミュニティを考えていくうえで非常に重要なのではないかと考えた。
- 一方で、生命/身体(機能の維持)に近い機能について、現在は地域のボランティアの方々

が支えていただいている活動が多くあり、例えば、6,203 名の福祉協力員方々、7,765 名登録がある生活安全パトロール隊、環境衛生面では市内約 3 万 5 千カ所に現在設置されているゴミステーションなどがある。これらのボランティア活動をすべて公助で賄うとコストが非常に大きくなることが予測される。

- また、「発想の転換と若者や将来の視点が必要」というご意見を踏まえ、若者の意識の参考として調べたことを紹介する。令和 6 年に内閣府が行った調査に「地域での付き合いはどの程度が望ましいと思うか」という設問がある。「地域の付き合いは必要ない」と回答した 18 歳から 29 歳の層は 4.2%にとどまり、地域のつながりに必ずしも否定的ではないと捉えることができる。同じ内閣府の調査で「何か社会の役に立ちたいと思っているか」という設問に対して、「社会の役に立ちたいと思っている」と回答した 18 歳から 29 歳の割合は 60%であり、社会や人との関わりに必ずしも否定的ではない現状が見えてくるのではないだろうか。
- 他者とのつながりについて考えるため、居住地を起点にしたつながりを整理した。自治会、町内会という関わりが住まいから最も近い場所であり、少し離れた場所で学校に関連した PTA、さらに離れたところで職場を中心としたコミュニティ、NPO といった関わりがある。さらに関係人口や大規模災害時のボランティアといった関わりも想定される。ネット上での SNS を通じたテーマ型のコミュニティの存在もあり、居住地や目的に応じて人との関わり方はさまざまあることがわかる。
- また、ライフステージの変化に関わるコミュニティの変化もある。例えば幼少期は保育園や幼稚園、青年期ではアルバイトやボランティア、社会人期は職場や子育て関連のつながり、高齢期には趣味やボランティア、また世代に関わらず、インターネット上のコミュニティでの関わりや推し活といったものもある。ライフステージごとにさまざまな人との関わりがあり、コミュニティの関わり方は非常に多様ではないかという整理にたどり着いた。
- 以上、これまでの検討会議のご議論から出発し、事務局で深掘りし、整理してみた結果を紹介させていただいた。本日の会議では、今後のビジョンの具体化に向け「コミュニティ、あるいは地域コミュニティというのがなぜ必要か」あるいは「コミュニティ、地域コミュニティとはどのようなものか」という、原点となるテーマについてご議論いただければと考えている。

<アンケート案についての説明>

- 前回の議論でいただいた「地域の取り組みはニーズにもとづいて行われると受け入れられやすい」というご意見にもとづき、現在、地域活動に参加している地域団体の方々の意見を伺ってまわっている。
- これとあわせて、現在、地域活動に参加していない方、今後もっと参加していただきたい

方へのアンケートの実施を考えている。

- アンケートの案についてご説明申し上げる。対象を踏まえると調査方法は web が有効ではないかと考えている。実施期間は 2、3 週間。規模は 1,000 人くらいを目指している。
- 質問事項は大きくわけて 3 項目を考えている。質問 1 つ目の案は、地域に関する現状の認識やニーズについての項目。例えば、地域やコミュニティという言葉からイメージする範囲について、近隣での助け合いや近隣での相談相手の有無についてなどである。
- 2 つ目は、現状の地域活動の認知度や参加の度合いについて。例えば、地域で行われている活動をご存知かどうか、地域活動や地域に限らないテーマ型活動への参加の有無やその理由などについて伺いたいと考えている。
- 3 つ目は、将来への活動の参加意向や見込み、参加に必要な条件等について。例えば、参加したい活動や参加しやすい条件、活動で得たい経験やスキルなどを考えている。
- 以上はあくまでも案であり、皆様からのご意見を踏まえて実施に向けて考えて参りたい。
- アンケートの結果は、4 回目以降の議論に活かしたいと考えている。

【議題(2)意見交換・構成員等発言要旨(順不同)】

多田政博 構成員

- 行政から地域に依頼される会議等は前年踏襲で引き継がれ、存続の意義に疑問を抱く会議が多い。形式的に引き継がれているだけの組織や本当に必要なのか疑問な取り組みを精査し、スリム化する必要があるのではないだろうか。また、福祉協力員やパトロール隊などで人数合わせのために強制的に自治会から人を出すケースもある。
- 若い人のなかにも地域のためにやりたい人は多いと思うが、若い人が意見や提案を出しても自治会の会長や先輩から否定され続け、やる気が削がれてしまうという話を聞く。会長が若い人の意見を否定し続けるため手伝いたくないという声も聞く。地域の長がいかに若い意見を取り入れるのが課題。
- 市からの補助金で活動している自治会が多いが、補助金も自治会費も必要なく、自治会が自ら稼ぎ、活動費を賄うという、補助金に頼らない自治組織づくりが 10 年後 20 年後には必要になるように思う。それが本来の自治組織ではないだろうか。

日高徹 構成員

- 自分の性格的に、問題点や課題がある場合は解決策を考え取り組んできた。自治会関連の組織についても変えてきたことがある。行政が事務局だけでなく、議案の提案まで行う自治会の会議に疑問を持ち、地域から議題を提案するように変更した。意識を変えていくところから手をつけることが大事だと思う。
- 必要性の低い会議は見直しが必要だと感じている。

- 地域のリーダーになる人への研修が必要ではないだろうか。
- 子どもを真ん中に、地域として子どもに関わっていくことが若い世代、親世代が地域活動に関心を持つ一つのきっかけになれば良い。見守り活動を含めて、地域も一緒になって子どものことを考えていくことが将来につながるのではないだろうか。
- まちづくり協議会主催で PTA が企画したイベントを実施する。PTA 自体を解散するという話も聞かすが、組織維持の議論ではなく、「子どもを中心に、子どものために何をするのか」という取り組みの原点に立ち返って活動するよう変化している PTA もある。
- 地域活動資金について、例えばまちづくり協議会へのお金はほとんどが利用の仕方が決められた紐付きで、地域で自由に使えるお金は少ない。金額を増やしてとは言えないが、もっと地域が自由にお金を活かせる仕組みにしていきたい。
- アンケートについて、web も良いが同時に紙ベースのアンケートも実施してほしい。例えば防災活動では戸建てと集合住宅によって意識が異なる。回答者の属性に戸建てと集合住宅など、居住形態も加えるとより活かせるデータになるのではないだろうか。

太田康子 構成員

- 30 年前に地域で役立つことをしようと始めた婦人会のメンバーが福祉協力員になり、お年寄りへの声かけを始め、今に至っている。一人暮らしの高齢者が亡くなったとき、地域の人たちがその方に声かけをしていたことをご家族がとても喜ばれた。若い人もいずれは見守られる側になる。安全安心のためにも高齢者の見守りは地域にとって必要。
- 折尾駅前にある折尾コミュニティガーデンは学生の企画に婦人会が賛同して取り組んでいる。企画した学生は就職後も仕事帰りに水まきをしてくれる。
- 若い人の地域への関わりは誘い方と社会や地域の役になっていると感じられるかどうかが大変だと思う。
- 市民センターに、誰でも気軽に立ち寄り、人との会話を楽しんだり、何か役立つことができたり、ときには子ども食堂をしたり、いろんな意見を出し合ったり、地域の課題について意見交換したりする場合、カフェのような場を自治会やまちづくり協議会がバックアップしてつくってはどうか。

西村健司 構成員

- 40 年くらい前、私が子どもの頃は他者との関わりや楽しいことが地域内にしかなかった。今の子どもたちは地域外に楽しいことがたくさんあり、地域で活動することに対する幸福感が少し低くなっているように感じている。
- 地域を、幸福を感じるコミュニケーションが取れる場にするには、地域でも新しいものを取り入れていかなければ、他の構成員が言われたように負担感だけが多くなって、地域のコ

コミュニティが広がっていかないのではないだろうか。

- 若い方の発想、新しい発想が取り入れられ、チャレンジできるコミュニティの場があり、小さな成果が出れば次につながっていき、地域のコミュニティのあり方が少し変わってくるのではないだろうか。
- 10 年ほど前に小倉南区の校区で若い方と先輩方の交わりが少ないということで、新しい祭りをつくったという事例がある。祭は 2000 人以上が参加し、現在も続いていると聞く。他の校区では、当初は若い人の企画は通らなかったが、10 年かけて説得し、成功事例ができて意見が取りやすくなってきたようだ。
- それまで小学校の体育館で行っていた敬老会を、趣向を変えてホテルで実施するといったように、既存の地域行事にうまく新しい発想を取り入れ、企画した人も参加者も楽しんで実施している事例もある。

勢一智子 構成員

- コミュニティの最大価値は幸福と楽しさだと資料で示されている。幸福や楽しさはいろいろなカタチがあるが、それは行政や制度が与えられるものではないと感じた。
- 孤立という状態と孤独という感情は違うという意見に賛同する。地域の幸福のためにどのような基盤や環境の整備が必要なのか、そこは行政がある程度に担える部分でもあり、地域としっかり話をしながら、地域コミュニティを変えていく作業をしていかなければならないと思う。
- 行政も地域の主体の一つであり、地域のコミュニティと協働共創することが大事だろう。
- 資料の 5 ページで示された通り、現在に至るまで、地域の方々がコミュニティのためにボランティアでさまざまなサービスを担ってくださってきた。それはとても尊いことであるが、今後もボランティアで良いのかということを問い直さなければならぬと改めて感じた。
- 全国的に民生委員をはじめ、人手が足りない状況があるのは、負担感が大きいことも要因としてあると思う。ボランティアで支えるままで社会が持続可能なのか、議論が必要。
- 地域で担っているサービスを場合によっては地域で起業して提供するような活動もあり、公務員の副業として展開していくこともあるかもしれない。そのように地域で小さく経済をまわすことも今後はあるのではないだろうか。
- 組織や会議を変えることは必要だが、実際に変えていくことは大変で前例踏襲が楽だという現実もある。行革が進まないのもこのような見えない抵抗勢力があるためだが、市長が思いきって始められたこの検討会議をテコにして、少しでも変える、地域の負担を軽くして少しでもやりやすくするというのは狙えるゴールの一つだと感じた。

大熊充 構成員

- 孤立と孤独は異なる概念であり、一緒に考えないほうが良い。孤立は状態であり、孤独は感情。孤立の状態を解消することは必要だが、孤独という人の感情をほかの人が解決することはおそらくできない。コミュニティでできることは孤立の解消だと思う。この部分の整理は必要。
- 学生と活動していて肌で感じているのは、自治会や地域との関わりが減ってきているなかで、逆に若い人たちは関わりを求めているのは事実だということ。人は一人では生きていけないため、人とのつながりが希薄化しているなかで、逆につながりを求める。
- 一方で、若い人たちは目的意識が高く、目的がしっかり定まれば責任を持って動き始める。目的意識がなく、やらされ続けて負荷がかかることはしたくない。地域に関わりたい若い人がいないわけではない。次世代につなげていくには、必要なこと、そうでないことを見直す必要がある。
- 若い人たちをいかに巻き込むかを考える必要がある。先輩方が行なってこられたことは素晴らしいが、自分たちが面倒だ、必要性を感じないと思っていることを若い人に押し付けては絶対にダメ。
- 子どもの頃から地域の人たちと関わる機会を持った子どもは、大人になっても関わりを持つ場合がある。横浜で商店街と小学校がつねに密接に関わり一緒にやってきて、小学生は成長したあとも商店街のおじいちゃんおばあちゃんが困っていれば帰省時に手伝ったり、会いに来たりしている事例がある。10年後20年後にも関係が続く。子どもの頃から地域の人とのつながりを育むことは大事であり、基本だと思う。要は巻き込み方の問題だ。
- 今は地域の組織は属人的であり、育成も属人的になると思う。人が交代しても若い人を取り込み育む属人的ではないメソッドが必要。先人たちの良かった知恵や知見を吸い上げ、戦略的に仕組みにして、地区に関係なく北九州市のメソッドを作り、若い人たちに渡していったらどうか。
- 地域の住民同士で関わりがあると外に出ても、ふるさとのおじさんおばさんが気になって関わり続ける。関係人口ではなく、住民のなかで関わりしろを作っておく必要がある。それはシビックプライドやローカルなアイデンティティかもしれないが、北九州市全体として今から取り組んでいくと、人口減少を食いとめる方向性につながるかもしれない、何かのソリューションが起きる可能性もあるのではないだろうか。
- 地域のおばあちゃんを保護する存在ではなく、一緒にお金を生み出す存在として捉えて取り組み、若い人の給料も出している。おばあちゃんたち本人も保護を求めているわけではない。そのような取り組みが一つの地区に一つあり、ゆるやかに働けば、微々たるものでもお金を生み出し、それが人と人との接点づくりや居場所づくりにつながる。
- 今の日本は「知らない子どもに声をかけるな」と挨拶が許されない時代になった。これがコミュニティ崩壊の根本にあると僕は考えている。コミュニティや人の幸せは、相手の存在を

認めること、相手に認められることで生まれる。そのきっかけになるのが挨拶だと僕は考えている。互いに挨拶をするようになると相手のことが気になり、思いやる気持ちが生まれる。挨拶をメソッドとして埋め込むと良いのではないだろうか。

- 挨拶をしない、相手に関心を持たない、困っている人に声をかけることをかっこ悪いと子どもたちが思っているとしたら、それは大人たちがそのように育んできたから。私たち大人のあり方とやり方が悪かったからだろう。
- アンケートについて、web で展開し、この機会にデジタルテクノロジーを教えることをワンセットで行うと一石二鳥になる。弊社の 90 歳のスタッフにデジタルの使い方を教え、今ではデジタルを使いこなし、人に教えている。

古賀えみ子 構成員

- 資料の 7、8 ページを見ると、若い世代は地域離れしている一方で、社会の役に立ちたいと思っている人たちが 60%いる。この「社会の役に立ちたい」ということには企業で働くことやボランティア活動も含まれているのだろうと感じた。一方で、地域活動について議論している者としては、地域での活動に関心のない若い人たちが 4.2%もいるのは先々不安。
- 小倉北区で隣接する小学校と関わりが深い市民センターが地域のキャラクターを募集し、小学生の考えたキャラクターが祭などのさまざまなシーンで使われている。そのような展開で子どもは自信を持ち、自分のまちの役に立っていることを実感する。小学校、中学校の頃から自分が地域の役に立っているような関わりを持たせることは大切だと思う。
- 市民センターは、子どもが関わりやすい日時が休みのため、平日でも利用できる高齢者が利用する場になっていると思う。市民センターをもっとオープンにして小・中学生が関わりを持てるようにしてはどうだろうか。
- 30 年前に鍵っ子ブームがあった頃、私は仕事をしていたために子ども会の役員をできず、子ども会をやめさせようと考えた。その時に「子どものためにやめてはダメ。役員はできるときにしてくれると良い」と言われた。いただいた温情にお返ししたいと思い、その後、役員をした経験がある。組織も大切だが結局は人。互助の精神、助け合う精神をいかに培っていくかだと思う。
- 地域の組織は人数合わせで人を集めるのではなく、指導員を育てていくことが必要ではないだろうか。
- 今は人助けで声をかけることに躊躇したり、席をゆずることを恥ずかしがる人もいる。困っている人やご近所さんに気軽に声をかけるコミュニケーションが育つと良く、北九州市には、困った人に声かけできる人が結構いるのではないだろうか。
- 市民センターの館長を知らない地域の人が多い。施設に閉じこもるのではなく、声を掛け合うコミュニケーションがあると良いと思う。

中村真理子 構成員

- 市内の中学校で、主に 2 年生を対象に認知症についての最新情報をお話した後、中学生にも地域での見守り役を担ってほしいという講座を行っている。この取り組みには打合せ段階から地域の方にも参加していただいていて、講座の最後に地域の方と生徒のグループワークを取り入れている。若い人が見守りに参加してくれることの安心感も生まれ、先々の幸せ感や安全安心につながるのではないかと考えている。
 - もともと地域は一つの家族という話から始まり、高齢の皆さんが登下校の見守り他、いろいろと取り組んでくださることに対して中学生が自分たちでできることをやろうと「子どもレスキュー隊」と名付けて取り組んでいる。
 - 横のつながりで心の部分も共有できることが大事だと思う。
 - 地域の人々の市民センター利用はだいたい 1 割くらいと言われ、地域の人たち全体で利用したり、市民センターの活動に参加したりするといったことがなかなかないのが現状課題。
 - 地域にもいろいろな人に出会える機会はあるのかもしれない、若い人たちが地域でそのような出会いがないと思っているとしたら、それは情報が少ないためかもしれない。
 - 現在は、市長がタイムリーに SNS で情報発信してくださるので、市が何をしているのかわかるようになった。そのように地域の取り組みもタイムリーに SNS で発信すると良いのではないだろうか。それに対して「いいね」がつくのもつながりとして良いと思う。
- 一方で、心のつながり、横のつながりを大切にしながら例えば紙媒体等の従来のスタイルと双方向でやっていくことが今後は大事になるように思う。

斉藤磨希 構成員

- 若い人たちが社会に役立ちたいと思いながら、それが地域での関わりではないのは、若いうちにいろいろな人と関わりたいと思い、地域だけでなく広域でコミュニティを作っていきたいということがあると思う。同じコミュニティにいても発見がなく、新しいところでいろいろな人に出会いたい、学生の場合は仕事や新しいチャレンジに向けてイノベーションを起こすためにいろいろな人と出会いたいのだと思う。
- 東京に住んでいた頃は挨拶や声かけはなかったが、こちらに戻ってきて、北九州市は挨拶や気軽に話すことが多いなと思った。
- アンケートについて、私の同世代の友人は福岡市や大阪などに出ている人が多い。市外に住んでいる人たちが、どういうことであれば北九州に戻りたいのか、どういうコミュニティがあればいいと思っているのかを知りたい。

松永裕己 座長

- 行政は前の年からの引き継ぎで同じことをやろうとするといった意見があった。そのような傾向はあるかもしれない。一方で、例えば、町内会や自治会を構成している我々も、「去年からずっとやっているし、変えるのは大変だし、言い出すのもちょっと気が引けるし」といったところがあるのではないだろうか。
- 小学生の頃に地域の高齢者と関わることは、自分のことだけでなく「お互いさま」を経験し、高齢者の方のことを想像できる機会だと思う。そのような機会がなければ、友達のことはわかるが、それ以外のことに思いを馳せることがないかもしれない。
- 「地域」というのは何をさしているのだろうか。行政の人が地域と言った場合、自治会や町内会をさしていることが結構ある。地域の人と言ったとき、地域全員をさすのではなく、特定の誰かをさしているわけでもないように思う。曖昧で便利な言葉です。一方で、例えば、「地域で見守りや安心を」というのは誰も反対しない。
- 現状の自治会や町内会などの活動を引き受けることは負担感が大きい一方で、誰かの役に立っている手応えがあまりないのでは。他の構成員が言われたメソッドみたいなものがあると、負担感が減ったり、そのぶん質が上がったりすることがあるかもしれない。
- 若者が社会で役に立ちたいと思う一方で、「地域活動に参加するのはちょっと……」と思う背景の一つに「一回参加したら抜けられない」ということがあるのではないだろうか。
- 私の実際の経験でボランティアを募る場合、例えば1ヶ月、3ヶ月と期間を決めて募集し、望む人は継続できるかたちにすると、わりと人が集まった。また、大学内では出会えない新しい知り合いができる、仲間意識ができる取り組みも人が集まった。誰かから直接「ありがとう」と言われる機会があり、誰かの役に立っているという手応えがあると集まる。この3つが若い人が集まるポイントだと思うが、地域のコミュニティにはこの3つがないように思う。
- 挨拶運動の話が出たが、私は子どもの頃から挨拶運動、オアシス運動がイヤだった。挨拶は大切であり行っているが、挨拶運動は押し付けられている感がとてもあり、形式的になっていく気がするためイヤなのだ。狭いコミュニティのなかで展開され、限られた人にのみ行う形式的な挨拶が本質なのだろうか？と疑問に思う。
- コミュニケーションができるのはとても大切なこと。夏目漱石の『三四郎』の最初の場面は、三四郎が電車のなかでまったく知らない人と会話をすることから始まる。以前はそれが許される時代だった。ところが日本は、話しかけられても返事をしてはいけない、知らない人には挨拶しない、道端で子どもが泣いていても逆に訴えられてはいけないので助けない、そのような社会になっている。そんな社会に未来はあるのだろうか。
- 本日の意見を少しまとめてみる。地域に関する会議や機能について、必要なものと必要でないものを整理し、組織のスリム化や見直しの必要があるという意見が多かった。
- 社会の役に立ちたいと思っている若者は多いが、彼らの巻き込み方、誘い方を変えれば

効果が見えてくるのではないか、若い人をはじめ、地域の取り組みに参加していない人に
関心を持ってもらうためには、巻き込み方に問題があるという意見も多かった。

- 自治会、町内会などで若い人が意見やアイデアを出しても年長者に受け入れず、否定されることがあり、否定され続けることで若い層のやる気が削がれるという話も出た。若い人たちの意見を受け入れ、トライしてみる仕組みが必要だろう。
- 面白いと思ったのは、リーダーになる人向けの研修やメソッドが必要という意見。企業は後継者を育成するが、地域で後継者を育成するという話は今までないように思う。
- どこまでが行政の仕事で、町内会や自治会がどこまですべきなのか、社協や町内会、自治会の役割分担を必要なのかどうかといった話も出た。
- 最後にビジョンに入れるかどうかは別として、お金に関する話も出た。
- アンケートについて紙でも行ったほうが良い、市外に出ている人の意見も聞きたい、デジタルのトレーニングを同時に行うと良い、回答者の属性に関する事など、いただいたご意見を踏まえ、アンケートの目的とそのために必要な手法を事務局と私で再考して、改めてみなさんにご意見をいただくというかたちで進めたい。

武内市長

<挨拶>

- 北九州市のコミュニティを支えてくださっている、あるいは各地でご活躍の皆さんにお集まりいただき、大変ありがたく思っている。
- 人口が減少し、地域がやせ細っていくなかでのコミュニティの問題は、とても大きなチャレンジだが、政令指定都市のなかで高齢化率ナンバーワンの北九州市は、同時に人のつながりが強く、非常に利他的なまち。そのような北九州で何か一つ解決策、モデルを作りたいと思い、スタートしたのがこのプロジェクトである。
- 地域コミュニティをどうするかは日本のこれからを左右し、日本全国が苦しみあるいは苦しみつつある課題だ。それを立て直していくために北九州市から一石を投じたいという思いを込め、今年、コミュニティのビジョン作りに着手した。
- 地域ごとに状況は異なり、何か一つを作ればすべてに当てはまるものでもなく、変わらなきやいけないこと、変わりたくないこともある。理屈だけではいけない実態もあるなど、いろいろな矛盾を抱えたテーマである。しかし、あえてその矛盾にチャレンジしながら、今までにない思いきったビジョンを目指していきたい。
- 素晴らしい皆さんのご支援を賜りながら、ぜひ北九州から新しいコミュニティのかたちを提案できる会にしていいただければと願っている。どうぞよろしくお願いいたします。

<議論を聞いて>

- どれも頷けるご意見をいただいた。そのなかで考えなければならなかったことをいくつか述べる。
- 1 つ目は、まずコンセプトをフレキシブルで出入り自由なものにしなければならないという感想を持った。ミラノの市民センターのような場所に行った際に、人の出入りがとても激しく、その場でのゆるやかな関係性が多くの人を惹きつけている印象を受け、ヒントがあると感じた。日本の人はとても良い責任感があるが、一方で、フレキシブルで出入り自由なプラットフォームのようなコンセプトに変えることもあると感じた。
- 2 つ目は、やはり楽しさが無いといけないということ。今の時代「こうすべき」だけではなかなか難しい。イベントだけでなく、例えばポイントがたまるといった楽しい仕組み、推し活ということもあるが、地域という切り口だけでなく、いろいろな好きなこと、楽しい要素が必要だと思う。
- 3 つ目は、地域で皆さんが活動されているさまざまなことを知っていただきたいということ。市政だよりで特集しているが、民生委員、食生活改善推進、まちづくり協議会、公園の愛護会ほか、本当に多くの取り組みが行われている。このことを知っていただくと、子どもや若い人たちも感化されるのではないだろうか。
- 4 つ目として、経済界や職場も巻き込まないといけないと思った。例えば、フィンランドのヘルシンキは地域のつながりがとても強く、16 時に仕事が終わる、食事をして、そのあとみんなで地域の集まりに行く。16 時に終業するのは無理だとしても、地域コミュニティへの企業のコミットは大事なことだと感じる。
- 最後に、本日の大事な気づきとしてお金のことがある。地域やコミュニティの活動は利他的でとても素敵な世界だ。一方で、ある程度お金とセットで考えなければ今後は維持が難しいという現実もある。お金の問題をこれからどう混ぜ合わせていくのか、お金の動きも見えておかないといけないと思った。
- 本日はいくつもの問題意識をいただいた。改めて感謝申し上げます。